

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32605

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02713

研究課題名（和文）高大接続に資する思考力・判断力・表現力育成のための教材開発に向けた国際連携研究

研究課題名（英文）Writing Discipline to Encourage Inquiry Thinking Through Deep Active Learning that contributes to High School-University Articulation Reforms

研究代表者

井下 千以子（Inoshita, Chiiko）

桜美林大学・リベラルアーツ学群・教授

研究者番号：60407757

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：高大接続改革に関する議論は大学入試に焦点があてられてきた。本来ならば、主体的・対話的な学びを育成する探究学習として検討すべき喫緊の課題であろう。そこで、本研究では、第一に、思考を鍛えるライティング教育に着目し、大学のライティング教育の歴史や、日本とフィンランドの先進的事例を分析した。第二に、探究学習のためのライティング教材とライティング・ルーブリックを開発し、批判的思考力や論理的表現力の育成に効果があるかを検証した。第三に、大学でのライティング経験が仕事の場で役立つか、職業的レリバンスを調査した。第四に、ライティングセンターの多様な機能を明らかにした。その成果を学会や講演会で発表し、出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高大接続の議論は入試改革に向けられているものの、大学入学共通テストは問題解決型思考や独創性のある論拠を問うているとはいえない。加えて高校の新学習指導要領では探究学習が重視され、教師の指導力向上や教材開発は急務となっている。そこで、第一に大学教育学会誌のアーカイブス进行分析し、思考を鍛えるライティング教育の枠組みを明確化し、主体的・対話的に学び、考えて書く力を育成する教材を開発し、ルーブリックで効果を検証した。第二に教師の力量形成に向けて国内外の先進的事例を分析した。第三に書く経験が卒業後の仕事に役立つことを示した。これらは探究学習を推進するための資料として学術的かつ社会的意義のあるものといえる。

研究成果の概要（英文）：Discussions on High School-University Articulation Reforms has focused on university entrance examinations. Originally, it should be an urgent issue to be considered as inquiry thinking through deep active learning. Therefore, in this study, first, we focused on writing discipline to encourage inquiry thinking, and analyzed the history of university writing education, and advanced cases in Japan and Finland. Second, we developed writing textbooks and writing rubrics to encourage inquiry thinking, and verified whether they are effective in fostering critical thinking and logical expression. Third, we investigated occupational relevance to find out whether writing experience at university is useful in the workplace. Fourth, we clarified the various functions of writing centers. The results were reported at conferences and published.

研究分野：高等教育

キーワード：思考を鍛える ライティング教育 探究学習 高大接続 教材開発 ライティング・ルーブリック ライティングセンター フィンランド

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究開始当初の学術的問いは、認知心理学における知識の捉え方に端を発している。2017年に公表された大学入学共通テストの記述式問題例は、限定された文字数で文中の特定部分を引用することが正答の条件とされ、正答は一つとする従来の試験と変わらず、自らの経験に照らし合わせ、知識を再構成する問題解決型思考や独創性のある論拠を問うた出題とはいえない(日本経済新聞,2017)。その後、採点の妥当性・信頼性や現場の負担が指摘され、記述式問題の導入は見送られた(朝日新聞,2019)。本来、高大接続改革の趣旨は、高校・大学を通して「主体的・対話的な学び」を継続する「接続」のあり方を検討することにある。すなわち、思考を組み立て、判断し的確な言葉を選択し表現する「主体的に考えて書く力」の育成は、高大接続改革における探究学習を推進する上での課題のひとつであると考えた。

(2)本科研採択直後に、大学教育学会課題研究2018-2020年度「学生の思考を鍛えるライティング教育(研究代表:井下千以子)」が採択された。学会では40年間に渡り、ライティング教育に関連した実践報告が活発におこなわれてきた。他方、学会として体系的に取組み、議論する場はなかった。そこで、一般教育学会の流れを汲む学会の成り立ちからも、大学教育の根幹となる思考力と表現力育成を課題とすることは、歴史の変遷を辿り、理論的構築を図る意義は大きいと考えた。それは本科研のテーマを俯瞰して位置づけ、より広く深く考察することにもつながった。

2. 研究の目的

2017年度初年次教育学会会員調査結果によれば、ライティングなどの学習技術型初年次教育は、2年次への連動性が低いことが明らかになった。井下(2014,2017)は論証型レポートのテキストを開発し、自ら問いを立て、信頼性のある根拠を示して書く訓練は、学生の思考を鍛えるとともに、初年次における主体的学習が専門教育につながる可能性と、大学での学びをその後のキャリアに活かす可能性があることを実践研究により示してきた。そこで、本研究では、思考を鍛えるライティング教育に焦点を当て、大学の授業改善と喫緊の課題である高大接続を視野に入れた教材の開発、リーディング学習との接続、さらには大学での学習経験が職業キャリアにどう活かせるかまで、長期的な展望に立ち、検討をおこなった。加えて、正課教育と正課外教育の連携について、ライティングセンターの機能を検証することにより、持続的統合的なライティング教育の包括的な支援体制について学際的多面的に検討することを目的とした。

3. 研究の方法

(1)本研究では、中学・高校・大学と長期的な展望の下、学力の3要素「主体的にものごとを構造化する思考力・答えを自ら生み出す判断力・その思考過程を的確に示す表現力」を育成するための教材を開発し効果を実証した。具体的には大学教育における読み書き教育の変遷を分析することによって、高大接続を踏まえた大学のライティング教育の枠組みを明確化した。PISA型学力で注目されたフィンランドの教育を批判的に検討し、理想ではない現実の姿を、初等・中等・高等教育を対象として現地調査し、思考力、判断力、表現力育成に活用可能な事例を分析した。

日本の先進的事例として慶應湘南藤沢中高一貫校を対象とし、中高での探究学習の成果が大学での学習にどう接続するのかを調査した。この調査分析した結果を、探究学習に資する教材開発に反映し、その効果を検証した。

(2)大学教育学会課題研究の成果については、2018-2020年度課題集会でのシンポジウム、大学教育学会大会ラウンドテーブル、自由研究で発表し、大学教育学会誌に投稿した。

(3) (1)と(2)の成果を統合し、書籍(井下,2022)として出版した。

4. 研究成果

(1) 思考を鍛えるライティング教育の枠組み

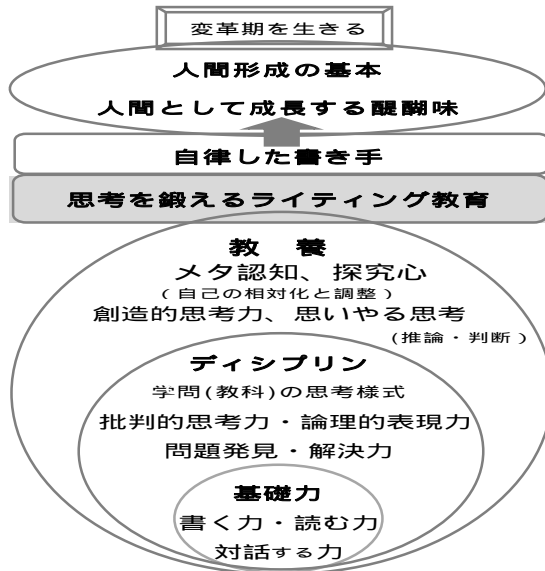


図1 思考を鍛えるライティング教育の枠組み(井下,2022)

大学教育学会誌のアーカイブス进行分析し、かつ国立教育政策研究所(2013:26-28)による「21世紀型能力」を参照して「思考を鍛えるライティング教育の枠組み」(図1)を作成した。基礎力、ディシプリン、教養の3層から成る。広くディシプリンに学び、文献を読み込み、現実を深く分析し、問いを温め、粘り強く考え抜いて書く力を鍛えるプロセスには、教養を深め、人間として成長する醍醐味がある。書くことを通して思考を可視化し、書きたいことや伝えたいことは何かを省察(メタ認知)することで、自分の生き方を見つめ直すことができる。それは変革期を生きる人間形成の基本となることを表している。

(2) 高大接続に向けた先進的事例の分析

フィンランドにおける教師の力量形成と読書文化

PISA2000の読解力で世界1位を獲得したフィンランドにおける書く力とその基盤となる読む力に焦点を当て、初等・中等教育の国語科の教師を対象としたインタビュー調査と授業観察を実施した。PISA高成績の要因は2点にまとめられる。第一は、教員養成課程である。学士課程から修士課程の6年間に基礎と理論を学び、修士課程では1年間に及ぶ教育実習で経験を積む。さらに教員養成課程を修了しても就職先は保証されておらず、選ばれた優秀な人材が教職に就いている。高校3年の文学作品を批判的に検討する授業では、国語と公民のダブルメジャーを持つ教員が社会的背景や歴史的観点から考察させ、文献を引用して論拠を示すレポートを課しており、大学教育への移行を企図したアカデミック・ライティングの指導が展開されていた。第二は、読書文化である。地域に開かれた図書館により、国民に読む習慣が根付いている。専門性の高い司書が学校と連携して情報リテラシー教育と論文作成指導を支援しており、的確に情報収集して読み解く力や深く考えて書く力がPISAでの読解力の高成績につながったと考えられる。

慶應義塾湘南藤沢中高(SFC 中高)における主体的・対話的な授業と考える書く力の醸成

中学・高校での探究学習が、いかに大学での学習に接続したか、探究学習に取り組むSFC 中高を対象とし、授業や論題のあり方が「考える書く力」がいかに影響したかを検討することを目的とした。高校・大学での論述課題と論述試験について、高校卒業時にグループインタビューを、大学1年修了時に質問紙調査を実施した。その結果、大学での十分な指導もないレポート課題、知識の記述だけを求める試験、一方通行の講義に失望しつつも、中高での対話的な授業や卒業研究、論理を問う試験で鍛えた「議論する力」「考える書く力」が大学の少人数演習での探究学習に活かされていた。高大接続の議論が入試改革に向けられる中、大学入試に左右されない環境で主体的対話的な授業を経験した生徒が、大学での探究学習にどう接続したかを示す資料といえる。

(3) 探究学習に資する教材開発と教養の涵養

自らの問題関心を探究し、批判的に思考することによって論証する論理的表現力を育成する教材を開発し(井下,2019,2020)、初年次支援科目と専門科目におけるライティング指導の効果を検証することを目的とした。その結果、初年次支援科目では、論証型レポートで批判的思考力と論理的表現力を習得し、アカデミック・プランニング・エッセイから学びレポートへと段階的に自己省察することでメタ認知を高め、大学での学びを探究しており、一連の初年次ライティング指導の効果が確認された。専門科目「生涯発達心理学」では、授業内容からテーマを設定し、自らの生き方に照らして問題関心を探究する論証型の序論を書く課題を課し、探究学習のためのライティング・ループリックを作成し評定した。さらに、ウェブ調査による学習意識・行動を踏まえた相関分析では、[論文基礎作法][序論練習][自己点検][論理性習得][メタ認知的学習]の因子が抽出され、教材に基づいた指導の効果が確認された。以上、探究学習を企図したライティング教材を用いた指導が、批判的思考力と論理的表現力を高め、自己省察を促すことを明らかにした。今後、こうした自らの在り方生き方や問題関心を探究する授業が多様な科目と連関することにより、学生の学びを深め、教養を涵養する教育へとつながる可能性があることが示唆した。

(4) 持続的統合的なライティング教育の包括的な支援体制

本科研と大学教育学会課題研究の成果は、井下編著(2022)に所収されている。本書は、大学教育学会課題研究「学生の思考を鍛えるライティング教育の課題と展望」(研究代表：井下千子)の研究助成費を受けて出版されたものである。また、本書には本科研の成果の一部も含まれている。本科研の成果は(1)(2)(3)で詳述した。以下に、本科研の成果も含めた、課題研究の成果を3点にまとめた。第一に、ライティング教育に携わる高校や大学の教員が授業で活用できる授業デザインや教材を示し、その効果を明らかにした。とりわけ、思考を鍛えるライティング指導のツールに加えて、読むことの指導や読書習慣の意義について説いている。第二に、「高大接続」と「探究学習」に関する事例分析を通じて、主体的で対話的な授業、よく練られた論述課題が、生徒や学生の思考を鍛えることを示した。さらに、大学で出題されるレポート課題を分析し、4つの型に分類している。大社接続についても取り上げた。大学でのレポート執筆経験が卒業後の職業生活に生かされるであろうという期待をもって捉えられていた。第三に、初等・中等教育から、大学のカリキュラムや学習環境の整備まで包括的な支援体制を示した。初年次教育・教養教育・専門教育の連関、正課と正課外を架橋するライティングセンター、大学図書館との連携、理系の作文技術と英語に関する考察、デジタル化に向けた支援など21世紀型能力を踏まえたライティング教育の未来まで、持続的統合的なライティング教育について展望している。

(5) 今後の課題

2023年度の高校2年生が使う教科書検定の結果が発表され、新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」や「思考力や表現力の育成」など探究学習が重視されている(毎日新聞,2022)。新教科「論理国語」は論理的思考力に加え、批判的思考力の育成も目標とし、「学術的な学習の基礎」となるとして、大学のライティング教育に接続する内容を含むと期待されている(島田,2021)。一方、論理的・実用的な文章を扱う「論理国語」と、生き方を考える「文学国語」を区別せず、一体に学習すべきという意見もある(読売新聞,2022)。また、探究学習には教師の指導力向上が必須となること、暗記型入試では探究学習の本格的展開は難しいこと、主体的な学びが先行して基礎力が不十分になる可能性もあることから、知識の伝達と探究学習のバランスが

重要だとする指摘もある(日本経済新聞,2022)。今後、高校でこうした探究学習が幅広く推進されるのであれば、大学は授業形態や履修者数、論題や指導のあり方、双方向に学びあえるカリキュラムや教授法について、高大接続のあり方を総合的に、かつ生き方を学ぶ学問の府として検討する必要がある。

引用文献

朝日新聞(2019)「記述式見送り、表明へ 大学共通テスト、来週にも 文科省」12月12日, 1.

毎日新聞(2022)「高校教科書検定:23年度使用教科書『深い学び』徹底『論理国語に小説』合格」3月30日, 1.

日本経済新聞(2017)「高大接続改革の概要公表 安西祐一郎日本学術振興会理事長、能動的学びへ転換 6月5日,16.

日本経済新聞(2019)「共通テスト記述式見送り思考力底上げ重い課題」12月18日, 38.

日本経済新聞(2022)「高校教科書主体的に学び深く 暗記より討論重視」3月31日, 47.

井下千以子(2014)『思考を鍛えるレポート・論文作成法』慶應義塾大学出版会.

井下千以子(2017)『思考を鍛える大学の学び入門 論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで』慶應義塾大学出版会.

井下千以子(2019)『思考を鍛えるレポート・論文作成法[第3版]』慶應義塾大学出版会.

井下千以子(2020)『思考を鍛える大学の学び入門 論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで[第2版]』慶應義塾大学出版会.

井下千以子編著(2022)『思考を鍛えるライティング教育 書く・読む・対話する・探究する力を育む』慶應義塾大学出版会.

島田康行(2021)「知っておきたい高校の「国語」改革 - 新しい学習指導要領を読む」

春日美穂・近藤裕子・坂尻彰宏・根来麻子・堀一成・由井恭子・渡辺哲司『あらためて、ライティングの高大接続 - 多様化する新入生、応じる大学教師』ひつじ書房.

読売新聞(2022)「高校教科書検定 国語の科目再編は無理がある」3月30日, 3.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 井下千以子	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 教員の多様性を活かした初年次教育のあり方 思考を深めるアクティブラーニングに向けて	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 初年次教育学会誌	6. 最初と最後の頁 37-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井下千以子・柴原宜幸・小山治	4. 巻 43(1)
2. 論文標題 探究学習を企図した専門科目でのレポート指導が 批判的思考力・論理的表現力に及ぼす効果 - 問題と目的 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 28-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井下千以子・柴原宜幸	4. 巻 43(1)
2. 論文標題 論述課題と指導内容に関する高大接続の観点からの検討 - 中高一貫校の事例をもとに -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 23-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井下千以子	4. 巻 大学教育学会誌
2. 論文標題 大学のライティング教育研究の歩みと課題 - 大学教育学会誌40周年の動向から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 20-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井下千以子	4. 巻 42(1)
2. 論文標題 思考力と書く力の基盤形成 - 大学のライティング指導の多様性に目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 25-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 桂啓壯	4. 巻 200
2. 論文標題 海外の図書館の最新動向(第22回)フィンランドの大学図書館における情報リテラシー教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本農学図書館協議会誌	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井下千以子	4. 巻 41(1)
2. 論文標題 学生の思考を鍛えるライティング教育の充実に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤善子・井下千以子・谷川裕稔・野田文香	4. 巻 40(2)
2. 論文標題 学習支援を学修成果に結びつけるための設計と運営	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 99-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井下千以子	4. 巻 10(1)
2. 論文標題 高大接続に向けた「主体的に思考し表現する力」の育成 2017年度初年次教育学会会員調査と事例分析をもとに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 初年次教育学会誌	6. 最初と最後の頁 99-105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KIKUSHIMA, M., TERAMOTO, T., & SHIBAHARA, Y.	4. 巻 41
2. 論文標題 The implementation and evaluation of a training program for developing undergraduates' critical thinking and attitudes	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Educational Technology Research	6. 最初と最後の頁 91-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 基盤教育と専門教育をつなぐライティング教育 - 書く力 考える力を育む -
3. 学会等名 日本大学文理学部, FDカフェ (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 論理的に考え、表現する力を育む - 教員の多様性を活かした“共通教育と専門教育の接続”に向けて
3. 学会等名 創価大学, FD研修会 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小山治・井下千以子・柴原宜幸
2. 発表標題 探究学習を企図した専門科目でのレポート指導が 批判的思考力・論理的表現力に及ぼす効果 - ウェブ調査による学習意識・行動を踏まえた相関分析 -
3. 学会等名 大学教育学会第43回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴原宜幸・井下千以子・小山治
2. 発表標題 探究学習を企図した専門科目でのレポート指導が 批判的思考力・論理的表現力に及ぼす効果 - ライティング・ルーブリックに基づく評価とその変化 -
3. 学会等名 大学教育学会第43回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 教員の多様性を活かした初年次教育のあり方 思考を深めるアクティブラーニングに向けて
3. 学会等名 初年次教育学会第14回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 大学のライティング教育研究の歩みと課題 - 大学教育学会誌40周年の動向から
3. 学会等名 大学教育学会2020年度課題研究集会シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井下千以子・柴原宜幸
2. 発表標題 論述課題と指導内容に関する高大接続の観点からの検討 - 中高一貫校の事例をもとに
3. 学会等名 大学教育学会2020年度課題研究シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井下千以子・柴原宜幸・小山 治
2. 発表標題 探究学習を企図した専門科目でのレポート指導が批判的思考力・論理的表現力の育成に及ぼす効果(1)
3. 学会等名 大学教育学会2020年度課題研究シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小山 治
2. 発表標題 大学時代のレポートライティング経験は仕事においてどの程度役立つか 社会科学分野と工学分野の比較
3. 学会等名 大学教育学会2020年度課題研究シンポジウム
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井下千以子, 佐藤広子, 小林至道, 岩崎千晶, 佐渡島紗織, 柴原宜幸, 大島弥生, 成瀬尚志, 関田一彦
2. 発表標題 ライティング・センターの機能と展望-正課と正課外をつなぐライティング教育を目指して
3. 学会等名 大学教育学会第41回大会要旨集, 302-303.
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 思考力と書く力の学術基盤形成 - 大学のライティング指導の多様性に着目して -
3. 学会等名 大学教育学会2019年度課題研究集会要旨集, 21-22.
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 深い学びを支えるアカデミック・ライティングと思考力・自律した学習者の育成に向けて
3. 学会等名 2019年度第1回千葉大学アカデミック・リンク/ALPSセミナー（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 アカデミックライティングを通していかに学生の「思考を鍛える」のか
3. 学会等名 関西国際大学, 教員研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井下千以子・大島弥生・成瀬尚志・小山治・小笠原雅正明・杉谷祐美子・関田一彦・柴原宜幸
2. 発表標題 学生の思考を鍛えるライティング教育の課題と展望
3. 学会等名 大学教育学会課題研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 思考を鍛えるライティング教育の充実に向けて
3. 学会等名 大学教育学会課題研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 加藤善子・井下千以子・谷川裕稔・野田文香
2. 発表標題 学習支援を学修成果に結びつけるための設計と運営
3. 学会等名 大学教育学会第40回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 大学の学び入門 論理的な思考を鍛えよう
3. 学会等名 同志社大学，プロが教える！図書館講習会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井下千以子
2. 発表標題 初年次教育で求められる文章表現・ライティング指導とは何か
3. 学会等名 創価大学，2018年度初年次教育実践交流会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 井下千以子編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 286
3. 書名 思考を鍛えるライティング教育 書く・読む・対話する・探究する力 を育む	

1. 著者名 井下千以子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 145
3. 書名 思考を鍛える大学の学び入門-論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで【第2版】	

1. 著者名 井下千以子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 171
3. 書名 思考を鍛えるレポート論文作成法 [第3版]	

1. 著者名 初年次教育学会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 202
3. 書名 進化する初年次教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	柴原 宜幸 (Shibahara Yoshiyuki) (30327275)	開智国際大学・教育学部・教授 (32524)	
研究分担者	桂 啓壯 (Kastura Keiso) (70265437)	宮城学院女子大学・一般教育部・教授 (31307)	
研究分担者	小山 治 (Koyama Osamu) (50621562)	京都産業大学・全学共通教育センター・准教授 (34304)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関